

(二十一) 丁目地蔵尊(ちようめじぞう)

西林木町の川跡境から伊努谷を越え鰐淵寺までの道端に一丁目毎に建てられている地蔵尊がありますが、昔から地元の人々は丁目地蔵尊(ちようめじぞう)と呼んで拝んでいます。

江戸時代の末頃、五ヶ寺札とか大札打ちと称した出雲巡礼札打ちが盛んに行われた頃、鰐淵寺越えの主な道であった伊努谷沿いの道端に、鰐淵寺を目的とする道順に一丁目毎に地蔵尊が建てられました。(丁目とは、現在の距離でおよそ九十三メートル)

今でもこれらの地蔵尊が多数残っており、土地改良とか伊努谷川の洪水等の為に他の場所に移動したり、紛失したため欠番の地蔵尊もありますが、地蔵尊には、右上に丁目が彫られており、施主の住所は丁目左下に施主の名は左右いずれかの下に彫られています。

道しるべの起点は、鰐淵寺が出发点ですが、北山の伊努峠を越えて伊努谷の入り口地点(中組町内・福島隆宅前)の石碑が分岐点で、一つは斐伊川の武志土手に至る道しるべ、もう一つは渡橋の観音様に詣りの道しるべと丁目毎に建てられています。

古老の話によりますと、これらの地蔵尊はいずれも、雲南地方産の花崗岩で造られており、三刀屋の峯寺の丁目地蔵尊の石質と同質と思われるので三刀屋の周辺で造られて運ばれたものだと思います。

そして、何故丁目毎に地蔵尊を建てたのかという疑問については

「巡礼札打ちの信者達は、杖を携え丁目毎に観音経を唱え金を打ち鳴らしながら拝んで通ったもんだ・・」

と、伊努谷を眺めつぶやきながら教えてくれました。

